

シリア：ロシアの介入が米英のウソを暴く——テロリスト はアメリカ

【訳者注】なぜ、アメリカやその同盟軍が、何年かかっても、宿敵だというアルカーイダや ISIS を退治できないのか——長年くすぶっていた謎が、ロシアの介入をきっかけに解けてきた。ウォールストリート・ジャーナルが、とうとう真相をばらしたからである——読めばわかるように、全く遠慮することなく。こんなことは“識者”の間では、ずっと前からわかっていたが、CIA とテロリスト集団が、実は親子関係（生みと育ての親）であって、敵対関係は見せかけだという事実が、メディアではタブーになっていた。これからメディア界では、少しずつ、こうしたタブーが解禁になり、これまで見えなかった大きな図が見えてくるだろう。この流れに逆らって、誤報や虚報にしがみつく新聞やテレビは、読者・視聴者を失うだけでなく、犯罪に加担する者と見られるだろう。

By Felicity Arbuthnot

October 8, 2015, Information Clearing House



なんと速やかに“国際社会”一般のウソと、特に米英のそれが、ロシアの参加以来、明らかになりつつあることか！

英首相デイヴィッド・キャメロンを取ってみよう。昨年9月24日、彼は国連で、イラクの ISIS を標的とする英軍機は送るが、シリアで同じ行動はとらない、特に地上軍については、絶対にそれはないと付け加えた¹。

イラクについて彼は、西側は“過去のあやまち”をおそれることはない、と付け加えた。イ

ラクが“過ち”だとしたら、破局や悲劇はどの程度を言うのか、誰も想像できない。

キャメロンはもちろん、真実のすべてを言わなかった。2013年、英議会はシリアには手を出さない決議をし、キャメロンは、議会の戦争承認を得られなかった、200年間で最初の英首相となった。いずれにせよ、今度の行為は、もう一つの不法行為になるはずである。なぜなら、彼ら（英軍）は、シリア大統領、もしくは政府から要請を受けておらず、国連の承認も得ていないからである。ところが今年7月、英空軍パイロットが、アメリカとカナダの飛行中隊に組み込まれて一緒に飛び、防衛省によれば、「情報、監視、偵察、および攻撃の使命」に従事していたことが判明した²。

9月7日、キャメロンはまた、シリアの英軍無人機が、ISISと共に戦っていた2人のイギリス市民を殺したと発表した。なんという皮肉であろうか！ 英政府は、キャメロンが自国民を殺した今、“自国民を殺した”と言って自国のリーダーを非難するすべての国民を、捕える指令を出している。ロンドンのタカ派の、王立統合省庁研究所ヘッド Michael Clarke は、この攻撃は「狙った暗殺」だと言っている。

殺された2人が、「…狙われたのは、イギリスが現在、法的に、英軍の活動のための戦争舞台として認めていない地域だった」と、クラークはコメントし、こう付け加えた、「我々の無人機は、CIAのものと違って、我々が軍事的に関わっていない領域で、狙った暗殺に使われたことは一度もないと、政府は主張している。³」ここに、もう一つの政府のウソが突き止められた。

“地上軍がない”という話も驚くべきウソであるようだ。Stephen Lendman が書いたように⁴、「8月2日、サンデー・エクスプレスは、SAS（英特殊空挺部隊）が ISIS 戦士の服装をして、ひそかにジハードイストと戦っていることを明らかにし」、こう書いている――

「このエリート部隊に属する 120 名以上の隊員が、現在、ひそかに黒服を着、ISIS の旗を振りながら、Shader 作戦といわれるものに従事し、ISIS と戦うふりをして、シリアの標的を攻撃している。」

これは、正確に 10 年前、2005 年 9 月のイラクのバスラで起こったことと、瓜二つだ――この時、イギリスの特殊部隊が、アラブの服を着て、爆薬を積んだ車に乗っているところを、イラクの警察に逮捕された。もし車が爆発していたら、もちろん“イラクの反乱兵”がやったことにされただろう。英軍は、この使命を帯びていた者たちを解放するために、警察署を爆破した⁵。何人脱走したかも、またイラク人の犯行とされ、イラク人が殺され、拷問されたこの“反乱”も、英と米の作り事だった――今日のシリアと同じように。

8月には、報道によると、SASの部隊が、ISISの財政担当者と言われたAbu Sayyafの暗殺と、彼の妻の誘拐のために、「米軍服を着て米特別軍に加わっていた」。どうも英国政府は、アメリカと一緒にのときだけ、またはアメリカの要求によって行動し、自国の議会は無視するようだ。

それだけではない。「約800の英海兵隊と、4,000の米海兵隊が、直ちに出動できるようにスタンバイしている」とレンドマンは書いている。

ロシア軍が、間違っただテロリストを攻撃したとって叩かれているのも頷ける。見分けがつかないのと、テロリストかどうか分からない上に、彼らは、黒旗を振りテロリストの仮装をしたSASをも攻撃するかもしれない。実に“込み入った織物”だ。

ロシアの外相セルゲイ・ラヴロフは、シリアを包囲する、首切りの、文化財壊し屋の怪物どもについて、CIAの訓練を受けた者たちか否か、弁別することなどできない。それで先週、こう言った、「テロリストに見え、テロリストのように行動し、テロリストのように歩き、テロリストのように戦うなら、それはテロリストだろう、違うか？⁶」

テロリズムに対するワシントンの弁別の立場を、驚くほどに見事に説明して、国防長官ジョン・ケリーは、こう言った、「重要なことは、ロシアは、ISIL以外の誰に対するどんな活動にも、加わる必要がないということだ。それは明らかなことだ、我々はそれを非常にはっきりさせている。」驚くではないか、テロリストの種類を弁別するのはシリアの仕事だ、ということである。

もちろん、米も英も共に、国連の承認も、当事国の政府の要請もなしに、全く不法に爆弾を落としたり、シリアの反乱兵を支援したりしている。ロシアはその空爆を、イラクのテロリストにまで延長する気かという、無言の質問にラヴロフが、自分たちはそんなことは考えていない、「私たちは礼儀を守る国民だ、要請がなければ出動しない」と答えたとき、——ケリーは顔を赤らめさせただろうか？

ウラジミール・プーチンは前から、「我々は…要請を受けたがゆえに、テロ組織に対し、彼らに対してだけ、戦うつもりでいる」と言っていたが、これはおそらく、アメリカが、シリア政府の関係地点や軍関係者を狙っている、と言われていることに触れて言ったものであろう。

ロシアの外交使節団は、アメリカに対しても、適切な礼儀を尽くしている。空爆を始める前

に、米 국무省報道官 John Kirby によれば、「バグダッドにいるロシアの高官が、今朝、米大使館員に、ロシア軍航空機が、本日、シリア上空において、対 ISIL ミッションのための飛行を始める予定だと通知してきた」。

「彼はさらに、アメリカの航空機は、これらのミッションの間、シリア領空を避けるように要望した。」ロシアは要するに、アメリカに対し、シリアを避けるように1時間前に通告してきたのである。アメリカは即刻、ロシアの攻撃が市民犠牲者を出したという報道で、これに応じた。残念なことに、攻撃の報道された時間には、ロシアの飛行機はまだ離陸していなかった。[訳者：9・11のときの、第7ビル倒壊の、BBCによる時期尚早の報道のように]10月2日には、「アメリカ主導の連合軍」の間にパニックが起ったようであり、連合軍は、「共同声明を出し、モスクワに対し、シリア反政府軍に対する攻撃を直ちにやめるように、戦闘はISISにとどめるように要求した」。(ガーディアン、2015/10/2)

この声明は、フランス、トルコ、アメリカ、ドイツ、カタール、サウジアラビア、およびイギリスによるものである。

しかし、アメリカの猫はすでにペンタゴンの鞆をとび出していて、ウォールストリート・ジャーナルにまで駆けつけていた。同紙は、前日にこういう見出しの記事を載せていた——
「ロシアのシリア空爆が、CIA 支援の反乱軍を狙う——米高官談」

「攻撃された1つの地域は、主として、CIA と同盟機関から資金、兵器、訓練を受けていた反政府軍によって占領されていた。」オーツツツ！

ミシェル・チョスドフスキー (Chossudovsky) は、彼の論文をウォールストリート・ジャーナルの話とつなぎ合わせて、不浄な沼のような、いろんな集団の絡み合いを、簡潔に解きほぐしている⁷——

「アルカーイダの友好団体であるアルヌスラは、アメリカの支援する“ジハーディスト”テロ組織で、無数の残虐行為を行っている。2012年以來、アルカーイダとアルヌスラ——ともに米情報機関に支えられている——は、シリア内部のさまざまなテロ企画を、結託して行っている。

「最近の展開では、シリア政府が、ロシアの対テロ空軍作戦のために、アルヌスラを標的として主として用いられる、自国の重要な地域を教示した。アルヌスラは、「自由シリア軍」(FSA) のテロ部隊と呼ばれている。

「ワシントンは、アルヌスラをテロ組織と分類した（2012年初め）にもかかわらず、アルヌスラと、彼らのいわゆる“穏健派反乱軍”を、兵器、訓練、輸送支援、新兵募集などの形で、援助している。この援助は、アメリカのペルシャ湾同盟国カタールやサウジアラビア、それにトルコやイスラエルなどを通じて、届けられている。」

ロシアが介入したとき、アメリカの国連大使 **Samantha Power** は、ツイッターを通じて、「我々はロシアに対し、シリア反政府軍と市民に対する攻撃を、直ちにやめるように要望する。」このような行動は、彼女の警告によると、「さらなる過激思想と過激化を煽るだけだ。」フツパ (**chutzpah**、イディッシュ語で、厚かましき、傲慢) も極まれりというべきだろう。2003年までは、そして米英の電撃戦までは、アメリカの援助を受けた、内臓を食い、死体をバラバラにする狂人どもはいなかった。シリアとイラクは、この地域で最も世俗的な国家の中に入っていた。

シリアは、ウソから悲嘆と文化の破壊を経て、狂気の、滑稽な“テロとの戦い”の場になってしまった。恐ろしい行為を正当化するウソと言い逃れは、ますます破れかぶれになったが、最も鈍い者だけが、テロリストはアメリカだということに気づけないでいる。

Notes:

1. <http://www.independent.co.uk/news/uk/home-news/iraq-crisis-david-cameron-recalls-parliament-for-debate-on-airstrikes-on-isis-9754029.html>
2. <http://www.bbc.co.uk/news/uk-33562420>
3. <http://www.theguardian.com/world/2015/sep/07/drone-british-citizens-syria-uk-david-cameron>
4. <http://www.thepeoplesvoice.org/TPV3/Voices.php/2015/08/06/uk-special-forces-fighting-assad-in-syri>
5. <http://www.globalresearch.ca/british-undercover-soldiers-caught-driving-booby-trapped-car/972>
6. <http://www.mail.com/int/news/us/3858296-russia-defends-military-action-syria.html>
7. <http://www.globalresearch.ca/obama-accuses-russia-of-going-after-americas-good-guy-terrorists/5479099>

Copyright © Felicity Arbuthnot, Global Research, 2015

賛同の多い読者のコメントの1例：

アメリカは、自分が訓練し、財政支援し、武装させて、シリアの人民と、彼らの民主的に選ばれた政

府を攻撃しようとする“穏健派”テロリストを、ロシアが攻撃したことで動転している。アルカーイダは、ISIS やその友好集団と同じく、すべて CIA/モサードの財産である。

ワシントンは、ロシアが、ワシントンのように（援助しながら）テロと戦うようなふりをしないので、発狂しかかっている。これこそ、アメリカ支援によるテロリストたちが、ものの2、3日で——13 カ月におよぶ、アメリカによる彼らへの偽装攻撃が、何の効果もなかったのに——現実にはひどい打撃を受けてしまった理由だ。

もしアメリカが本当にテロに反対ならば、彼らは一生懸命ロシアと協力するだろう。ロシアの対テロリスト作戦への彼らの反応が、すべてを語っていて、アメリカのウソと、人殺しの二枚舌を、全世界に向かってさらけ出している。